



第12回世界ポスタートリエンナーレトヤマ 2018 審査結果 入賞作品発表 入賞作品

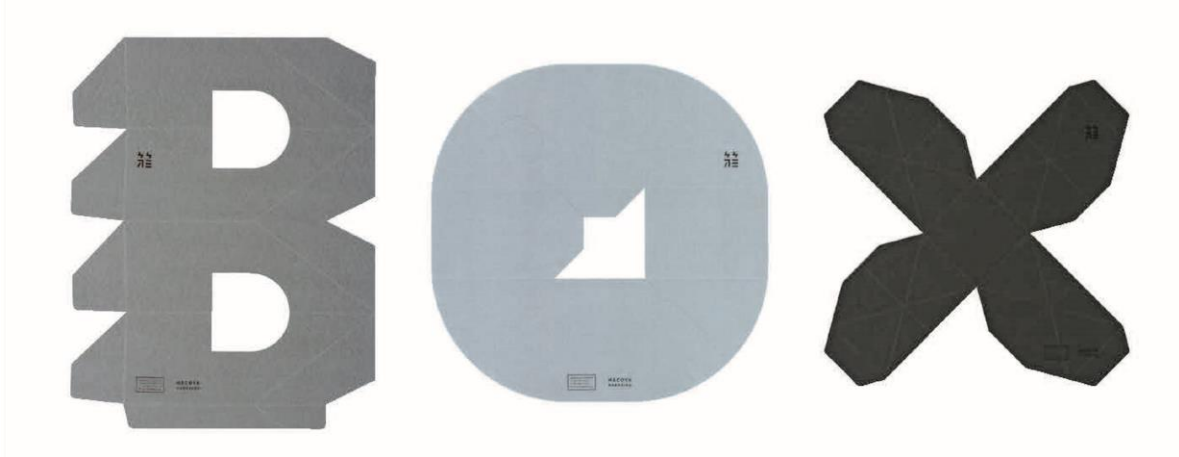
グランプリ



ヴェュー、トアン(アンドレ・バルディンガー&トアン・ヴェュー)(スイス、ドイツ)
《bvh グラフィック週間での展覧会ポスター》2018 (A 部門)



金賞



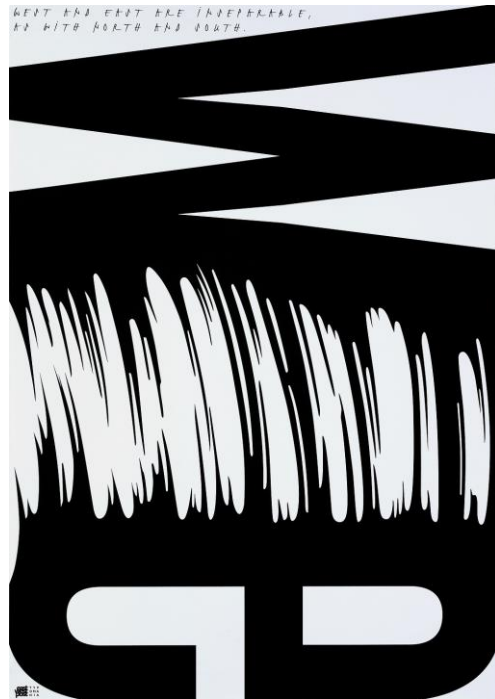
森川 瞬(日本)《箱屋の箱になる文字型展開図ポスター》2018 (A 部門)



ザオ、チャオ(中国)《伐採禁止 動物保護》2018 (A 部門)



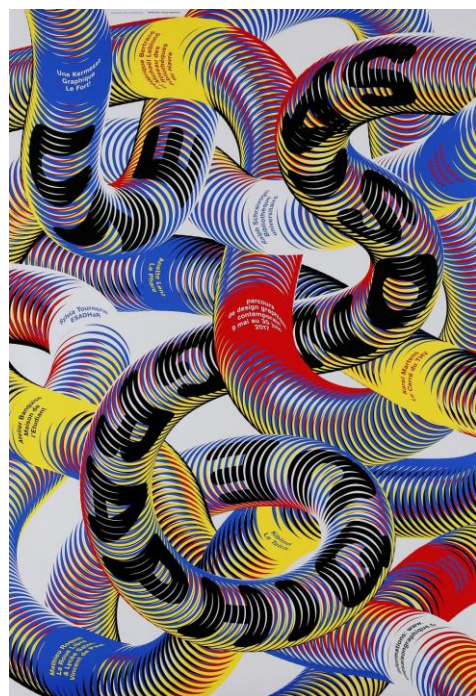
銀賞



へ、ジャンピン(ドイツ)《West & East 東と西は分かつことができない。AGI2015》2017 (A 部門)



中澤 定幸(日本)《茶々》2017 (A 部門)



シュライフォーゲル、ラルフ(スイス/オランダ)
《グラフィック週間 ル・アーブル》2017 (A 部門)



銅賞



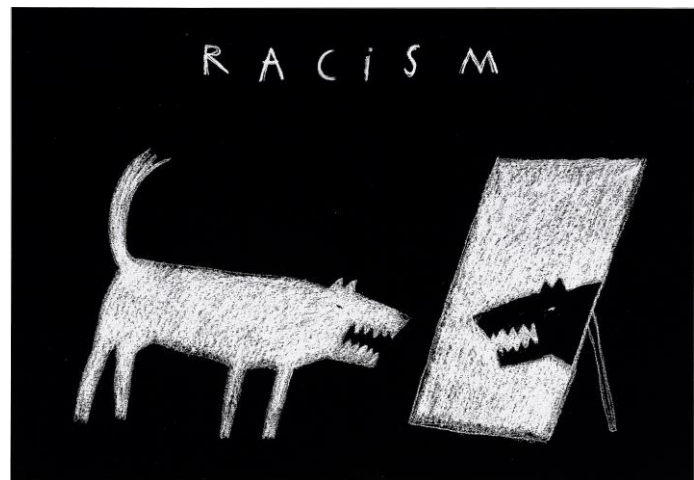
バイトリク、ヤン(ポーランド)
《グラフィック・フェスティバルーパリを祝う》
2016 (A 部門)



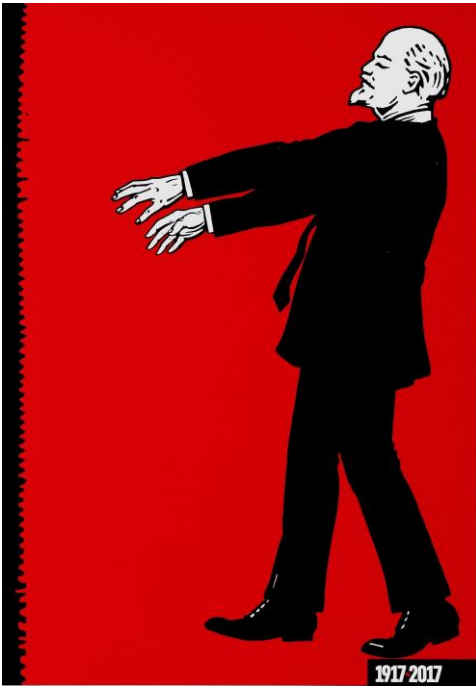
服部 一成(日本)《a cup of sake 日本酒》
2016 (A 部門)



小泉 由美(日本)
《カンティネッタ・サリュ》2016 (A 部門)



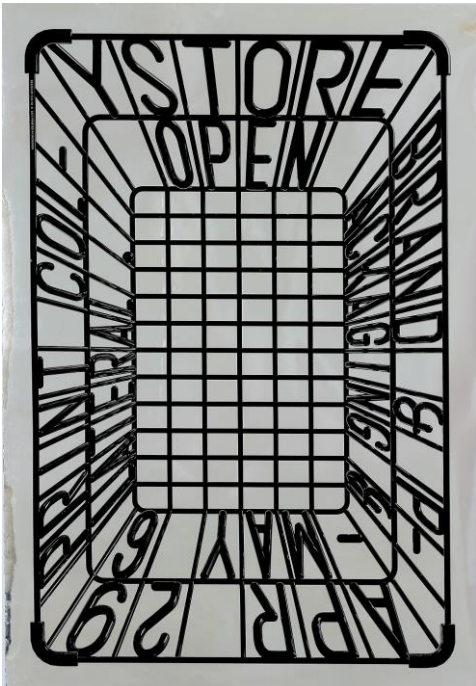
ムイチカ、グジェゴシ(ポーランド)
《人種差別》2016 (A 部門)



オロシュ、イシュトヴァン(ハンガリー)
《1917-2017 ロシア革命 100 年》2017
(A 部門)



パク、クム ジュン(韓国)
《D.T デザイン×台北》2016
(A 部門)



ユー、ツージー(中国)
《Y.STORE オープン》2017 (A 部門)



チャン、ルイ&ラオ、ジェンシャン(中国)
《地球》2017 (B 部門)

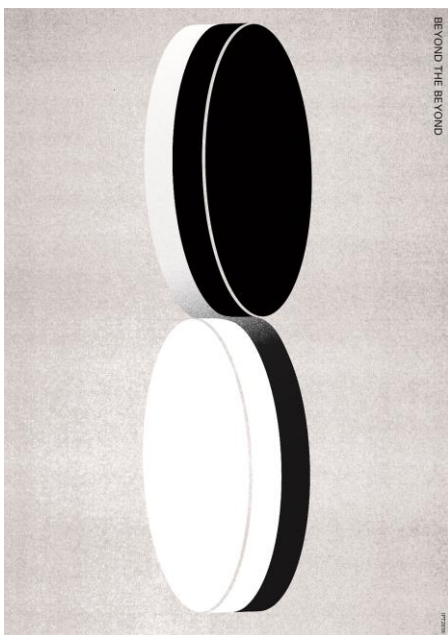


U30 金賞



松本 千里(日本) 《目を覚ませ》 2018

U30 銀賞



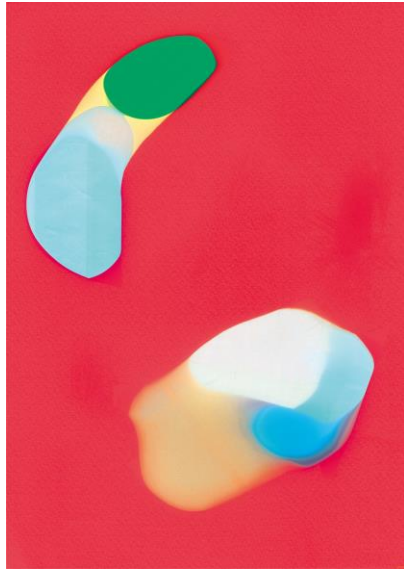
原田 雄太(日本) 《オセロセロ》 2018



上田 楠菜子(日本) 《旅立ちの日》 2018



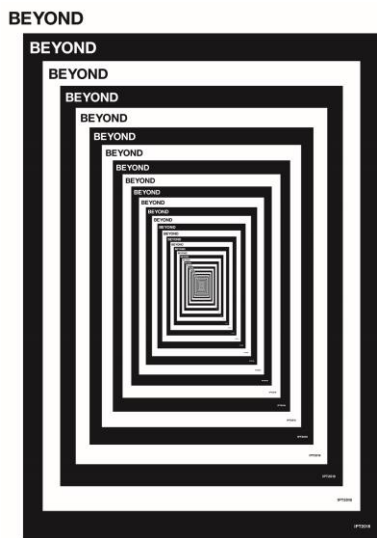
U30 銅賞



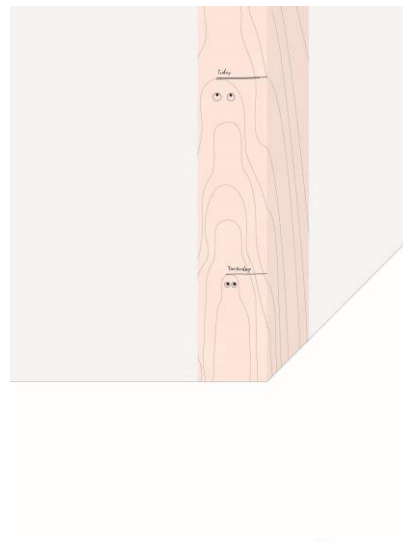
根岸 桃子(日本)
《Beyond_3》2018



オミニナ、マリヤ(ロシア)
《Beyond_2》2018



田中 隆史(日本)
《Poster(s)-Clean》2018



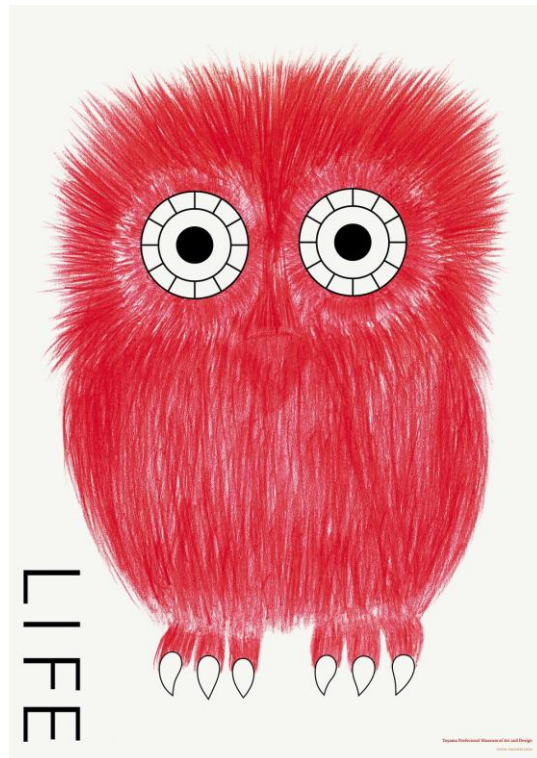
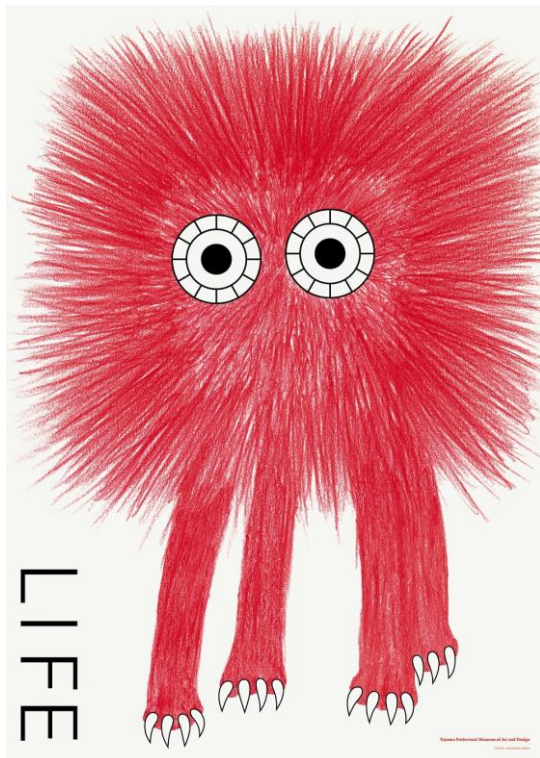
玉田 裕太(日本)
《線》2018



吉岡 七海(日本)
《Beyond》2018



審査員特別賞



永井 一正(日本)《LIFE》2017 (A 部門)



IPT2018 第二次(国際審査) 審査講評

松永 真 (グラフィックデザイナー)

「風は吹いた」

第12回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2018には、47の国と地域から3,239点ものポスターが集まった。前回よりも応募数が減ったとはいうものの、この急激なデジタル化社会の逆風の中、よく集まったと思う。そして、一割強376点のポスターが入選した。中でも“U30”に呼びかけた「Beyond」というテーマは応募者も多く、大変な激戦だったが、金賞の松本千里さん、銀賞の上田楠菜子さん他多くの秀作は大きな収穫であった。

ポスターの審査というものは、性格上ほとんどが瞬時に選ばれる。7人の国内審査では、過半数の4票以上が合格である。しかし、3票、2票の中には我々審査員が見落としがちな何かがあるのも事実である。言語や文化、生活習慣の違いである。それが国際審査というものの大きな責任である。故に、我々は常に謙虚な気持ちで接しなければならない。入洛すれすれのポスターをより厳格に丁寧に見た。多くの見落としが無かったことは幸いだった。そんな疲労感の上にあってこそ、賞の選定が、ピュアなものになる。そういうことが審査の大変なところである。しかし、一方ではその中から生まれる1点のグランプリこそが、時代の風を生むのだ。応募数よりもはるかに大きな意味を持つ。

海外より招いた2名の国際審査員と国内代表の3名の審査員をあわせた5人による賞の審査は白熱し、議論も百出した。汗はかいたけれど、結果はとても清々しいものであり、とても爽やかな風が吹いたと思う。その作品は、トアン・ヴェーフ氏(ドイツ)とそのパートナーであるアンドレ・バルディンガー氏(スイス)によるb.v.hという二人の頭文字のロゴだけの《bvh グラフィック週間》という展覧会の大型ポスターだ。あらゆるしがらみを突き抜けたシンプルで有機的な造形である。インパクトがあって、類型を脱したシズル感は躍動的で美しい!! 金賞の森川瞬氏の、箱の展開図がタイポに化けた《BOX》は、圧倒的にユニークであり、もうひとつの金賞のザオ・チャオ氏(中国)の《伐採禁止 動物保護》は、年輪を動物に重ねたドローイングとカリグラフィーの渾然一体が魅力的であった。続く銀賞も銅賞も力作ぞろいで、選者が異なれば、どのようにも入れ替わることだろう。

最後に一言、このトリエンナーレを初期より亀倉雄策氏らと共に力強く支えてきた永井一正氏が、今回、審査員を退いたと思ったら、何のてらいもなく一応募者として初出品してきたことの驚きである。しかも、グランプリ作品の胸ぐらを掴んで四つ相撲であった。若手の進出に一步をゆずって、予定になかった“審査員特別賞”が誕生した。このサプライズを特筆して、最後の審査講評とさせて頂くことにしたい。



浅葉克己（グラフィックデザイナー）

（掲載準備中）

三木 健（グラフィックデザイナー）

第12回世界ポスター トリエンナーレ トヤマ 2018の第二次審査で各賞が決まった。

見事グランプリを射止めたのは、フランスで活動するトアン・ヴェーフー氏（ドイツ）とアンドレ・バルディングー氏（スイス）による《b.v.h グラフィック週間》というタイトルのポスターだ。

タイポグラフィを中心とする彼らの多彩な活動を「baldinger・vu-huu」という自社のイニシャル《bvh》に託し表現している。有機的な造形による強いインパクトが理屈を超えた刺激となって審査員を釘付けにする。美しさと神秘さをあわせ持つ花に、生き物たちが魅了されるように、このポスターには不思議な媚薬が塗り込まれているかのようだ。

さて、今回のグランプリを議論する中で新たに設けた賞がある。

それは、最後までグランプリを争った永井一正氏の《LIFE》に対してだ。

審査員のなかでも《bvh》と永井氏の《LIFE》は互角に拮抗し、約一時間にわたって議論が重ねられた。

永井氏の《LIFE》には、デザイナーとして半世紀以上の制作を重ねてもなお新しい表現に挑み、自身を超えていこうとする姿勢がある。そこには、次に続く若い人たちへの一つの指標がある。そのような《LIFE》は、グランプリはじめ各賞決定というものさしでは測りきれない、まさに、この度のテーマ「Beyond」のように、ある種「超えた」存在のポスターなのではないか。

このような議論を経て、全審査員同意の元、「審査員特別賞」を設けることにしたのだ。

この他、金賞、銀賞、銅賞のいずれも、接戦で甲乙を付けるのに苦悩した。

加えて、今回から設けられた30歳未満の若いデザイナーのチャレンジ部門は、応募数の約5%のみの入選となる厳しい選考だった。

その中で金賞を射止めたのは、福岡のデザイン事務所で働く松本千里氏の「山」という漢字に目がついた、とてもインパクトのある作品だった。

第一次審査、第二次審査を終え、いま思うことは入選すら難しい。賞に入るなんて雲をつかむようなものだと感じた。そして、賞の行方も一人でも審査員が入れ替われば大きく変わることをここに記しておきたい。

世界のポスターを眺め続けた暑い日がやっと終わった。賞を選んだ立場が評価される展覧会がもうすぐ始まる。あなたにとってのグランプリを探しに富山県美術館にぜひお越しいただきたい。



メルヒョール・インボーデン（スイス）

3239 点のポスターを国内審査員が 376 点に絞り込んだ。

国際審査員のわれわれは、入選作から受賞作品を選ぶため集まった。なによりもまずは、ポスターデザインの多様なアイデアを目の辺りにして圧倒された。さらに、今日のデジタル技術発達のなか、手書きのポスターやコラージュ作品を見出すのもたいへん新鮮であった。現代社会の抱える問題を語りかけるような、自然や他の重要なテーマを扱うポスターはいつ見ても心地よい。

最初に、多数のポスターからある程度の数まで絞ってゆく。それから審査員ひとりひとりが同じ数の票を持って、カテゴリー毎に受賞作を選んでいく。国際審査では毎度だが、大切なのは異なった意味そして同時に文化的相違を議論することである。今日の世界ではグローバル化のせいですべてが均質に見えるが、われわれの好むスタイルはそれぞれである。とはいえ最終的な議論を重ねてゆけば、国内審査による入選作からもっとも優れた数作品を選べる。

最後に、私個人は、政治的・社会的・文化的諸側面を備えた力強いポスターをいくつも選べたのを嬉しく思っている。それは、著名なデザイナーたちも若いデザイナーたちも、そのようなテーマにいまだ関心を抱き取り組んでいる証に外ならないのである。

ピオトル・ムオドジェニエツ（ポーランド）

400 点近くにおよぶほどのポスター、どれも高レベル、となれば当然審査は簡単なものではなく長時間にわたった。審査員の意見はときにぶつかり合った。しかし、国際審査員 5 人は最善の絞り込みをすべくともに汗をかき、そしてそれが達成できたと私は考えている。つまるところ、ここ富山で他の 4 人の国際審査員と審査作業を進めるのは、うれしいことであった。